

日本語教科書におけるほめと返答

犬飼 英男
京進ランゲージアカデミー

Compliments and Responses in Japanese Textbooks

INUKAI Hideo
Kyoshin Language Academy

This paper examines how compliments and responses are handled in eight current elementary level Japanese textbooks, and reveals that the socio-linguistic interactions covered in the textbooks do not necessarily reflect the results of previous studies and the author's survey on responses to compliments by Japanese native speakers. Then this paper suggests that more pragmatic aspects need to be included in actual instruction to help learners to understand types of compliments and responses which can be different from culture to culture. It is also suggested that instructors using these textbooks can supplement their instruction by adding information particularly on more common responses.

1.はじめに

Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論によれば、人は一般的に「他者から認められたい」というポジティブ・フェイスと「他者から侵害されたくない」というネガティブ・フェイスの2つのフェイスを持つ。日常生活におけるコミュニケーションの場面には、フェイスを脅かす様々な行為が存在する。それがFTA (face threatening act)であり、人はFTAを軽減するために、様々なストラテジーを用いている。

他者をほめるという行為は、他者との間で良好な関係を築くためのポジティブ・ポライトネス・ストラテジーのひとつとされている。例えば、「その服、とても素敵ね」といったように相手の持ち物をほめることは、ほめ手の好感情を伝え、受け手のポジティブ・フェイスを満たそうとする行為である。一方、受け手にとって、ほめを肯定的に受け入れた場合、自身のポジティブ・フェイスは満たされるが、これは逆に Leech (1987) のいう「自己の賞賛を最小限にせよ」という謙遜の原則に反する行為となる。一方、受け手がこれを回避するためにほめを否定した場合、ほめ手の発言を聞き入れなかつたという点でほめ手のポジティブ・フェイスを侵害することになるため、

ジレンマが生じる。

ほめに對しどう返答するかは、社会文化的規範が影響すると考えられる。石原&コーベン (2015) は、「ほめ及びほめに対する返答」は、「その文化で美德とされている価値観や言語行動様式を如実に反映している。そのため、他文化で標準的に使われているほめことばやこたえを自分の文化の語用論的規範にあてはめて解釈すると誤解が生じたり、他文化に対する固定概念が生まれたりしやすい」(p.145) と述べている。ほめるという行為には、相手とのコミュニケーションを円滑に行おうとする意図が含まれていることが多いと考えられるが、ほめ手側と受け手側が、ほめと返答に関する文化間の相違を把握していない場合、逆にコミュニケーション上の障害につながる可能性がある。例えば、何をほめるか(ほめの対象)について日本語母語話者と日本語を母語としない者との間で傾向に相違があった場合、日本語を母語としない日本語学習者が、日本語母語話者であれば普通はほめないものをほめる、あるいは普通はほめるものをほめないといったことが起きる。また、ほめへの返答についても、日本語母語話者であれば肯定的に受けとめる場面で否定的な返答をしたり、その逆のことが起きる可能性がある。こういっ

た事態を避けるには、日本語学習の過程で日本語母語話者のはめと返答に関する傾向を知ることが必要である。

機能シラバスの日本語教科書では、「依頼をする」「許可を求める」「誘う」といった項目がしばしば取り扱われるが、「ほめと返答」を項目立てしているものは、筆者の調べた範囲では非常に少ない。では、現在、一般的に用いられる総合テキストについてはどうであるか。

本稿では、日本人のはめについて、ほめの相手、ほめの対象、ほめへの返答に関する先行研究を整理した後、現状の日本語教科書においてほめと返答がどのように取り扱われているかについて分析を行う。そして、両者を比較する中で、今後の日本語の語用論的指導に向けた提言を行う。

2.先行研究

2.1 ほめの相手との関係

ほめと返答のような語用論的な課題は、相手により言葉が調整されるため、相手との関係を明らかにする必要がある。石原＆コーベン（2015）では、ほめと返答に関するデータ収集を行う際の状況要因として、「社会的地位」「距離」「ことの重大さ（ほめる対象）」の3つがあげられている。

社会的地位とは社会的上下関係を意味し、ほめ手からみた受け手が上司や先生のように目上であるか、同等であるか、目下であるかによる差異に着目する。また、距離とは親疎関係を意味し、親しい間柄であるか、初対面のようにまだ心理的に距離がある関係かによる差異に着目するものである。「ことの重大さ（ほめる対象）」については、次の2.2で述べる。

2.2 ほめの対象

ほめは文化的背景と密接にかかわることから、何がほめられる属性かという社会的認識は、文化によって異なる可能性が高い。表1に、ほめの対象に関する先行研究を整理する。

同じ「外見」が対象であっても、どのような外見がほめの対象となるかは一律ではない。筆者はインドネシア在住時、久しぶりに会ったインドネシア人から“Sekarang tambah gemuk.”（ちょっと太ったね）

と言われ、少し不快に感じた経験がある。しかし後で確認したところ、インドネシア人にとって太っていることは「お金があって、ごはんがたくさん食べられる状態」つまり「富裕である」ことを意味することであった。「太っている」は私をほめることを意図して発せられたわけだが、ほめ手、受け手に相手の社会文化的規範についての知識や理解が欠如していると、このように文字通りの意味を超えた適切な解釈が行われないことがある。Holmes (1986)にも、同様の例としてニュージーランドでは「やせたね」がほめ言葉にならず、健康状態が悪いのを心配していると受けとめられることが挙げられている。

【表1】

	ほめの対象
丸山 (1996)	「所持物」「外見」「技量」「性格」「その他」
大野 (2010)	「外見」「持物」「内面（才能・達成、性格・行動、人全体、その他）」「作品」「家族」「その他」
古川 (2003)	「容姿」「性格・属性」「能力」「行動・態度」「関係ある人」「服装・装飾」「作品」
石原 & コーベン (2015)	「容姿、所有物」「パフォーマンス、技能、能力」「人格や性格」

大野 (2010) は、シナリオ談話資料 101 作品を元にほめの対象の分析を行っている。最も高い割合を示したのは「行動」の 28.3% で、「作品」の 20.1%, 「才能」の 17.6%，と続く。また、犬飼(2018)は日本大学生 84 名を対象にほめの場面に関する自由記述のアンケート調査を行っているが¹、ほめの対象として挙がったものを分類した結果、最も割合が高かったのは「能力」の 57.2%、次が「行動・態度」の 25.7% で、この 2 件で全体の 8 割強を占めている。大野 (2010) における「作品」及び「才能」は犬飼

¹ 日本大学国際関係学部の学生 84 名を調査対象として、ほめと返答についての調査を実施した。

(2018)においては「能力」に分類され、合計値は37.7%で、次が「行動」の28.3%となることから、ほめの対象の順位は2つの調査で同様となっている。

2.3 ほめの返答

ほめの返答は、寺尾(1996)、丸山(1996)、平田(1999)、清水(2009)にみられるように、収集したデータを「肯定型」「回避型」「否定型」の3通りに分類して分析を行うのが一般的である。表2に、日本人のほめへの返答についての先行研究を整理する。

【表2】

	肯定型	回避型	否定型
Barnlund & Araki (1985)	64%		36%
横田 (1985)	21%	59%	20%
寺尾 (1996)	30%	48%	22%

先に述べた、筆者が日本人大学生を対象に実施した調査では、肯定型が約70%，回避型が約25%，否定型が約5%であった。「日本人はほめを受け入れず謙遜する」ということがしばしば言われるが、実際のコミュニケーション場面では、ほめを否定することはそれほど多くはないということができる。

ほめへの返答について詳しく分析を行うため、各返答パターンにおいて更に細かい分類が行われる。分類の仕方は研究者により異なるが、以下の表3に17の小分類を設定した清水(2009)の例を挙げる。

【表3】

大分類	小分類
肯定型	感謝・同意・喜びの表明・肯定的コメント
回避型	ほめ返し・冗談・説明・功績の移譲・疑い・トピックの変更・否定的コメント・提供・嫉妬の表明・無返答
否定型	不同意・後悔の表明・困惑の表明

3. 日本語教科書におけるほめと返答

日本語教科書において、ほめと答えはどう扱われ

ているか。機能シラバスをうたったテキストを見ると、「許可を求める」「依頼する」「断る」といった課題解決のための機能は、たいていの場合、項目立てて採りあげられているが、「ほめと返答」を扱っているものは少ない。筆者の調査した範囲では、ボイクマン・小室・宮谷(2006)によるロールプレイに主眼を置いたテキストと、清水(2013)による中上級向けの機能シラバスのテキストが観察されたのみであった。

機能シラバスは、例えばサバイバルジャパンーズのように日本語学習者が日本で生活する上で最低限、必要なスキルや、買い物や旅行など何か明確な目的があり、それを達成するためのコミュニケーションに必要な日本語を取り扱うものである。日本語学習者が日本で遭遇する可能性が高い場面を取り上げ、すぐに使える日本語を学習する。ここで、例えば「依頼する」と「ほめられたときに返答する」この2つを比較した場合、必要度という点でいえば、前者のほうが高いと判断されるであろう。仮にほめられたときに適切な返答ができなかったとして、その他の目的遂行に係る会話ができない場合に比べれば、大きな問題ではない。従って、教科書という限られたスペースの中で、ほめと返答が取り扱われるケースは少なくなるのであろう。

次に、日本語教育の現場で使用されている代表的な総合テキストにおいてほめと返答がどのように取り扱われているか、調査を行った。対象とした日本語教科書は、初級から初中級向けの以下の8冊である。

- (1)『みんなの日本語 初級I 第二版』(2012)
- (2)『みんなの日本語 初級II 第二版』(2013)
- (3)『日本語初級1 大地』(2008)
- (4)『日本語初級2 大地』(2009)
- (5)『初級日本語 げんき I 第二版』(2011)
- (6)『初級日本語 げんき II 第二版』(2011)
- (7)『できる日本語 初級』(2011)
- (8)『できる日本語 初中級』(2012)

以下、各教科書で観察されたほめと返答について、

詳細にみていく。引用部²の下線は全て筆者によるものであり、実線はほめ、波線はほめに対する返答である。なお、(7)については、ほめと返答に該当する事項は検出されなかった。

まず、始めに、『みんなの日本語 初級Ⅰ第二版』『みんなの日本語 初級Ⅱ第二版』に掲載されているほめと返答を例1から例3として採りあげる。例1では、会話の当事者であるAとBの関係は明らかにされていないが、「ですます体」を使用していることや会話の内容から、まだそれほど親しくない間柄の相手との会話であると考えられる。はじめにAにより「日本語が上手ですね」というほめが行われ、続けて「どのくらい勉強しましたか」という質問に移っていることから、Bがほめに直接的に返答する機会がない。次の「すごいですね」というほめに対しては、Bは「いいえ、まだまだです」と返答している。

例1

A : 日本語が上手ですね。どのくらい勉強しましたか。

B : 1年ぐらいです。日本へ来てから、始めました。

A : そうですか。すごいですね。

B : いいえ、まだまだです。

(『みんなの日本語 初級Ⅰ第二版』 p.135)

ほめの対象は、日本語を上手に話せるという「能力」である。先行研究でもほめの対象として上位にくるものであることから、初級の教科書で最初にとりあげる例としては適切といえる。一方、「まだまだです」という返答は、「日本人は謙譲を美德とする」というイメージからくるステレオタイプ的な表現であり、返答パターンで分類すると、否定型の不同意に該当する。先行研究では、ほめの返答における否定型の割合は高いとはいえないため、注意を要する。初級の最初に学ぶほめと返答においては、「ありがとうございます」といった肯定型の表現で受けるほう

² 教科書からの引用を行う際、漢字のふりがなについて省略する。

がのぞましいと考えられる。これに続ける形で、回避したい場合の例として「日本語はとてもおもしろいです」等、また否定したい場合の言い方として「いいえ、まだまだです」等を挙げるべきであろう。また、実運用に資する活動とするためには、AとBとの関係がどうであるか、設定を明らかした上で取り組むことも必要である。

次の例2では、会話の当事者がワット先生と大学職員であることが明らかにされている。大学職員の「すごいですね」というほめに対し、ワット先生は「あまり売れませんでしたけどね」と返答している。

例2

ワット : 昔、「上手な整理の方法」という本を書いたことがあるんです。

大学職員 : へえ、すごいですね。

ワット : あまり売れませんでしたけどね。

(『みんなの日本語 初級Ⅱ第二版』 p.103)

この場面におけるほめの対象は、例1と同じく「能力」である。大学職員からのほめに対するワットさんの「あまり売れませんでしたけどね」という返答は、分類すると回避型の「否定的コメント」に該当する。大学職員のほめは、ワット先生が自ら「本を書いたことがある」と発言したことを受けたものである。ワット先生としては、既に謙遜の原則に反しており、肯定的な返答を避けようとする意識が働くことが考えられる。従って、この文脈では、回避型、あるいは「ぜんぜんすごくないですよ」といった否定型の返答であっても、例1と比べるとそれほど違和感はないといえる。

例3は、会社の同僚であるミラーさんと鈴木さんの会話であるが、例1と同じく、ほめへの返答が否定型の「不同意」に分類される。ほめの対象は、ここでも能力である。鈴木さんの「すごいですね」というほめに対し、ミラーさんは「いいえ、一生懸命練習したのに、優勝できなくて、残念です」と返答している。

例3

鈴木 : ミラーさん、マラソンはどうでしたか。

ミラー：2位でした。
鈴木：2位だったんですか。すごいですね。
ミラー：いいえ、一生懸命練習したのに、優勝できなくて、残念です。
(『みんなの日本語 初級Ⅱ第二版』 p.161)

この会話からはミラーさんのストイックな人物像が浮かび上がるが、2位という友人からすれば賞賛すべき結果に対し即座に否定型で返答するのは、ほめ手のフェイスを大いに侵害する行為であり、実際にこのような返答をされたら日本人は「せっかくほめたのに」と少し違和感を持つ可能性がある。例1でも述べた通り、即座に否定型で返答するのではなく、いったん肯定型で受けたほうがコミュニケーション上の転轍が生じないであろう。

「みんなの日本語 初級Ⅰ」「みんなの日本語 初級Ⅱ」から検出されたこれらの例をみると、ほめへの返答が否定型に偏っていることがわかる。これは、場面における会話の相手との関係がそれほど親しくなかったり、友人との会話ではなく職場での会話であることも理由として考えられる。また、今回調査した第二版が出版されたのは2012年及び2013年であるが、ほめと返答の記載は初版から変更されておらず、初版が出版されたのは1998年であり他の教科書に比べて古いことも影響している可能性がある。実際に指導を行う際には、他の返答パターンにも言及すべきであろう。

次に、『日本語初級1 大地』『日本語初級2 大地』に掲載されている4つの例について分析を行う。まず、例4であるが、これは人関係にあるリンさんとスミスさんの会話で、ほめの対象は「行動」である。リンさんの「よく練習しますね」というほめに対し、スミスさんは「ええ」と肯定型の「同意」で返答した後、「来週の土曜日、市民グラウンドで試合がありますから」と回避型の「説明」を行っている。

例4
リン：マリーさん³、一緒に帰りませんか。

³ スミスさんのフルネームがマリー・スミスであるため、「マリーさん」と呼びかけている。

スミス：すみません、先に帰って下さい。
わたしはもう少し練習してから、帰ります。
リン：マリーさんは、よく練習しますね。
スミス：ええ。今週の土曜日、市民グラウンドで試合がありますから。
(『日本語初級1 大地』 p.109)

このように、いったん肯定型で返答してから回避型でコメントする形は、前述の日本人大学生への調査結果でも多く見られ、ほめ手と受け手の双方のフェイスを保つストラテジーということができる。

次の例5は、友人関係にあるジョーダンさんとチャチャイさんの会話である。ほめの対象は「所有物」である。ジョーダンさんがチャチャイさんのTシャツを「いいですね」とほめたのに対し、「ありがとう」と、肯定型の「感謝」で返答している。

例5
ジョーダン：ポンさん⁴、そのTシャツ、いいですね。
チャチャイ：ありがとうございます。
ジョーダン：新しいTシャツですか。
チャチャイ：ええ、まあ。
(『日本語初級1 大地』 p.131)

前述の日本人大学生への調査結果では、所有物に対するほめの返答は肯定型が75%程度で、小分類では「感謝」が最上位の75%程度であり、この場面のように「ありがとう」と返答するケースは実際に多く見られる。ただ、ほめに対し感謝のみ返して終わることには、何かしら居心地の悪さを感じる。自己肯定感をやわらげるために、説明等を加えたほうがよいと考えるが、実際の会話ではどのようにあるか、調査・分析が必要である。

例6は、友人関係にあると思われる木村さんとマレさんの会話である。木村さんが、マレさんの新しいアパートの環境について「いいですね」とほめ、

⁴ チャチャイさんのフルネームがポン・チャチャイであるため、「ポンさん」と呼びかけている。

マレさんが「やっと部屋がきれいになりましたから、遊びに来てください」と返答している。この場面でのほめの対象は「所有物」で、ほめの返答は回避型の「トピックの変更」である。

例6

木村：新しい部屋は気持ちがいいでしょう。
マレ：はい。朝は鳥の声が聞こえます。それに、窓から公園の桜も見えます。
木村：いいですね。
マレ：やっと部屋がきれいになりましたから、遊びに来てください。
(『日本語初級2 大地』 p.1)

先の例2と同様、マレさんが自ら部屋の環境のよさを話したことが、ほめを誘発している。それに対し、「重ねて肯定型では返答しない」という、例2と同じストラテジーが選択されている。

次の例7は、木村さんと知人であるチャチャイさんの会話である。木村さんの「すごくおいしいですね」というほめに対し、チャチャイさんは「ありがとうございます」と返答している。この場面でのほめの対象はおいしいタイカレーをつくる「能力」であり、ほめの返答は肯定型の「感謝」に分類される。

例7

木村：これはタイカレーですか。
チャチャイ：ええ、みんなで作ったんです。食べてみてください。
木村：すごくおいしいですね。
チャチャイ：ありがとうございます。あ、今、1
01番教室でインドネシアの踊りをやっていますよ。
(『日本語初級2 大地』 p.89)

先の筆者の調査結果からも、能力のほめへの返答で最も高い割合を示すのはこの「感謝」であり、その後で回避型の「トピックの変更」を続けている点、会話として自然な流れであると感じられる。

次に、『初級日本語 げんきI 第二版』『初級日本語 げんきII 第二版』に掲載されている5つのほめ

と返答を挙げる。例8は、みちこさんが、友人のスーさんと、スーさんの家族の写真を見ながら話をしている場面である。まず、みちこさんが高校時代のスーさんの写真を見て「かわいいですね」とほめている。ほめの対象は「容姿・外見」である。

例8

みちこ：これはスーさんの家族の写真ですか。
スー：ええ。
みちこ：スーさんはどれですか。
スー：これです。高校の時はめがねをかけていました。
みちこ：かわいいですね。
スー：これは父です。アメリカの会社に勤めています。
みちこ：背が高くて、かっこいいですね。これはお姉さんですか。
スー：ええ。姉は結婚しています。今ソウルに住んでいます。
(『初級日本語 げんきI 第二版』 p.166)

これに対し、スーさんは「これは父です」と続けており、返答スタイルとしては回避型の「トピックの変更」にあたる。これに続けて、みちこさんはスーさんのお父さんについて「背が高くて、かっこいいですね」というほめを行っている。家族に対するほめであるが、所有物的な側面もあるといえる。このとき、みちこさんはスーさんの返答を待たずに「これはお姉さんですか」と次の質問に移っている。これは例1にも見られたが、ほめに対する返答が行われていない形であり、回避型の下位分類「無返答」のように受け手が意図的に返答しない場合とは異なり、そもそも返答の機会がないということになる。例8のみちこさんがスーさんのことに対する興味を持って次々と質問するような行為は、それ自体がほめを含意していると考えられる。また、容姿・外見に対する直接的なほめを繰り返すことは、受け手に気恥ずかしい思いをさせることになるため、ほめ手が受け手の返答を待たずに話を進めることは、受け手のストレスを回避する効果を生んでいるといえる。

例9は、「ロバートがバーベキューで料理をしてい

る」という場面設定があり、みちこさんがロバートさんを「上手ですね」とほめている。ほめの対象は「能力」である。

例 9 (Robert is cooking at the barbecue)

みちこ : 上手ですね。 ロバートさんは料理するのが好きですか。
ロバート : ええ、よく家でつくります。
(『初級日本語 げんき I 第二版』 p.185)

例 8 と同じく、みちこさんはほめに対する返答を待たずに「ロバートさんは料理するのが好きですか」と質問している。従って、ロバートさんが「ええ」と言ったのは「上手ですね」というほめに対する肯定ではなく、「料理するのが好きですか」という質問に対する肯定である。

先にも述べた通り、ほめられた時に肯定型で返す場合、受け手が謙遜の原則に反することになり、否定型で返す場合、ほめ手のフェイスを侵害する。受け手がそういったジレンマに陥ることは、ほめ手としても予想可能である中で、受け手が返答しないで済むよう、ほめ手側が質問等を続けてトピックを変更するのは、ほめ手側のコミュニケーション上のひとつの中略

例 10 は会話文ではなく、文型練習の中で登場するほめである。ほめの対象は主に所有物であるが、ここでは「～んです」という文型を使うことに主眼が置かれている。Example にみられるように、「すてきな車ですね。」とほめられた場合の返答は「父のなんです。」であり、返答スタイルとしては回避型の「功績の移譲」である。

例 10 Responding to the comments using ～んです

Example : すてきな車ですね。
→父のなんです。

- (1) きれいな花ですね。
- (2) 新しい靴ですね。
- (3) かわいい服ですね。
- (4) いいかばんですね。
- (5) かっこいい彼ですね。

(『初級日本語 げんき I 第二版』 p.277)

文型の定着を目的とした練習であるため、全てのほめに対し同じスタイルで答える形となるが、実運用を想定すれば、いったん肯定型で返答した後に「～んです」を使った形を続ける形での指導を行ってはどうかと考える。

次の例 11 と例 12 では、いずれもほめ手がほめを行った後、受け手の返答を待たずに質問を行っている。例 11 はペアワークで登場する会話文で、B さんが 100 メートル泳げることに対し、A さんが「すごいですね」とほめる。ほめの対象は能力である。A はほめた後、受け手の返答を待たずに「今も 100 メートル泳げますか」と続けている。例 12 では、たけしがメアリーにセーターをもらい、「いいね、このセーター。こんなのはほしかったんだ。」とほめる。ほめの対象は「いいセーターをくれた」という行動である。そしてたけしはメアリーの返答を待たずに、「メアリーがあんたの？」と質問を続けている。

例 11 Pair Work - Ask if your partner could do the following things when they were children. Expand your conversation.

A : 子供の時、泳げましたか。
B : はい、泳げました。
A : どのぐらい泳げましたか。
B : 100 メートルぐらいです。
A : すごいですね。 今も 100 メートル泳げますか。
B : たぶん泳げると思います。

(『初級日本語 げんき II 第二版』 p.38)

例 12

メアリー : たけしくん、はい、これ。
たけし : えっ、ぼくに？ どうもありがとう。開けてもいい？
メアリー : うん。
たけし : わあ、いいね、このセーター。こんなのはほしかったんだ。
メアリーがあんたの？
メアリー : うん、小さいかもしれないから着てみて。
たけし : ちょうどいいよ。ありがとう。
(『初級日本語 げんき II 第二版』 p.50)

『初級日本語 げんき I 第二版』『初級日本語 げんき II 第二版』の会話例で扱われているほめと返答（例8, 例9, 例11, 例12）は、ほとんどが受け手に返答機会を与えないで質問を続ける形となっている点、特徴的である。実際の会話においてこのような場面は十分、起こりうるが、ほめにどう返答するかを学ぶ機会も設けるべきと考える。

最後に、『できる日本語 初中級』に掲載されている2つの例を挙げる。例13は、アンナさんの家に木村さん、パクさん、ワンさんが招かれた場面での会話である。アンナさんは木村さんと「ですます体」で、パクさんはくだけた話し方をしていることから、親疎関係には差があることがわかるが、このことはほめへの返答の内容には影響を与えていない。

例 13

木村：素敵な部屋ですね。わあ、かわいいテーブル。
 アンナ：そのテーブル、西川さんのお母さんからいただいたんですよ。
 木村：そうですか。
 パク：あ、きれいな絵がかぎってあるね。
 アンナ：あ、その絵も西川さんのお母さんがくださったんだ。
 パク：へえ、いいねえ。
 ワン：アンナさん、これ、中国の料理。
 今日はパーティーだからいろいろと作ってきたよ。

（『できる日本語 初中級』 p.118）

木村さんが「素敵な部屋ですね。わあ、かわいいテーブル」とアンナさんの所有物をほめたのに対し、アンナさんは「西川さんのお母さんからいただいたんですよ」と返答している。これは、回避型の「トピックの変更」あるいは「功績の移譲」（ほめられるべきことをしたのは、自分ではなく西川さんのお母さんである、ということ）に分類される。続いてパクさんが絵をほめているが、これも同様に所有物に対するほめである。アンナさんの返答は、テーブルをほめられたときと同じである。「西川さんのお母さんにいただいた」という事実を説明することは、ほ

めを容易に回避できる方策であるが、これも実運用を想定すると、肯定型の返答を先に行ってから説明をするほうが自然であるといえる。回避が二度、続いていることから、それが事実であっても、せっかくほめているのに場に白けた雰囲気が漂いかねない。

その後に、パクさんが「いいねえ」と羨望も交えほめを行っているが、アンナさんはこれに対し返答していない。ただし、場面としては、他の話者が別の話題をはさんで話題が転換された状況であることから、アンナさんが回避型の「無回答」を選択したわけではなく、返答の機会がなかったということである。複数の参加者による会話の場面では、こうしたことは起きやすいと考えられる。

次の例14は、佐藤さんとカルロスさんの会話である。佐藤さんは、カルロスさんが食事を自分で作っていることについて「頑張ってるんだねえ」とほめている。ほめの対象としては、「行動」である。これに対し、カルロスさんは「あ、そうだ。佐藤さん、ちょっとお聞きしたいことがあるんですが、いいですか」と返答している。

例 14

佐藤：今、食事は自分で作ってるの？
 カルロス：はい。国では作りませんでしたが、日本へ来てから作るようになりました。
 佐藤：そうかあ。頑張ってるんだねえ。
 カルロス：あ、そうだ。佐藤さん、ちょっとお聞きしたいことがあるんですが、いいですか。

（『できる日本語 初中級』 p.162）

カルロスさんの回答はまさに回避型における「トピックの変更」であるが、若干、唐突感がある。先の調査において、「トピックの変更」は、ほめられたことに対し多少なりとも関連のある周辺のトピックを持ちだす、という形で観察された。しかし、この場面では全く別のトピックを始めており、「ほめを回避するためにトピックを変更した」というより、「相手の話に耳を傾けておらず、自分の話したいことを話そうとしている」という印象を与える。はずかしい気持ちを隠そうとした結果、そのような事態にな

することもあるが、この文脈からは読み取れない。ここは、例えば「はい、いろいろな料理を覚えました」といった肯定型の返答を入れたほうが、円滑なコミュニケーションとなるのと考えられる。

ここまで、8冊の日本語教科書について内容を確認し、ほめと返答を扱った14例について、ほめ手と受け手の関係、ほめの対象、ほめの返答についての分析を行った。ほめの返答パターンを分析した結果を、以下の表4に整理する。

【表4】

教科書名	例	返答スタイル	
		大分類	小分類
みんなの日本語初級Ⅰ	1	機会なし	—
		否定型	不同意
みんなの日本語初級Ⅱ	2	回避型	否定的コメント
		3 否定型	不同意
日本語初級Ⅰ 大地	4	肯定型	同意
		5 肯定型	感謝
日本語初級Ⅱ 大地	6	回避型	トピックの変更
		7 肯定型	感謝
初級日本語 げんきⅠ	8	回避型	トピックの変更
	9	機会なし	—
	10	回避型	功績の移譲
初級日本語 げんきⅡ	11	機会なし	—
	12	機会なし	—
できる日本語 初中級	13	回避型	功績の移譲
		機会なし	—
	14	回避型	トピックの変更

4.おわりに

本稿では、日本語教科書で採りあげられているほめと返答について、先行研究における分析結果と照らし合わせながら分析を行った。

ほめ手と受け手の関係という観点で、まず、親疎関係について述べる。ここでは仮に会話が「ですます体」である場合をあまり親しくない関係、くだけた言い方である場合を親しい関係とすると、例1～例11はそれほど親しくない関係、例13及び例14は親しい関係ということになる。上下関係について

は、上司と部下、教師と学生と言った明らかな上下関係が提示されている例はなく、例1・例2・例10・例11が不明で、その他については同等であると考えられる。いずれにおいても、相手との関係がほめと返答に影響を与える点に直接的に言及するものとはなっていないため、教室活動を行う際に補足する必要がある。

ほめへの返答については、『みんなの日本語』の主な返答パターンが否定型であった。『げんき』『できる日本語』については、回避型または機会なしが採用されており、肯定型と否定型は扱われていない。一方、『大地』は肯定型と回避型が採用され、否定型が見られなかった。バランスよく採用されているとは言えないが、ここで重要なことは、日本語を教える側が、「教科書の会話例が回避型だから回避型しか教えない」という硬直的な対応にならないようにするということである。ほめと返答について指導を行う際には、教師はこれまでに見てきた「だれをほめるか（親疎関係、上級関係）」「何をほめるか（ほめの対象）」「ほめへの返答」などの項目について事前におさえた上で、授業においては学習者にとって典型的といえる例をメインに据えつつ、様々なパターンがあることを提示すべきであろう。

日本語に機能面からアプローチする場合、課題解決のための機能を優先することになりがちであるが、実際の日々の生活において頻繁にそのような場面に遭遇するわけではない。会話の大部分は、友人や職場のメンバーとの「おしゃべり」である。このとき、ほめの持つコミュニケーション上の潤滑油としての機能は極めて有用であり、より高度なコミュニケーションを志向する場合、返答パターンを知っておくことは意義があると考える。総合的な日本語教科書においても、返答パターンとして最も割合が高い肯定型を中心に扱い、回避型や否定型にも言及する形をとるべきである。また、『げんき』で採用されている返答機会を与えないストラテジーについても、実際の会話で起こりうることとして指導することは有意義と考える。

今後に向けては、ほめへの返答が単発で終わる場合とそうでない場合がある中で、後者についてどのような順序で返答が行われるのか（例えれば肯定型の

感謝で受け、次に回避型の説明がくる等）、調査・分析を行い、典型的なパターンを見出し、会話例として提示できるようをまとめていきたいと考える。

参考文献

- 石原紀子編著、アンドリュー・D・コーベン著（2015）『多文化理解の語学教育—語用論的指導への招待』研究社
- 犬飼英男（2018）『ほめと返答—日本人大学生とインドネシア人大学生の比較研究—』、修士論文、日本大学
- 大野敬代（2010）『日本語談話における「働きかけ」と「わきまえ」の研究—目上に対する「ほめ」と「謙遜」の分析を中心に—』、博士論文、早稲田大学
- 清水崇文（2009）『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』スリーエーネットワーク
- 寺尾留美（1996）「ほめ言葉への返答スタイル」『日本語学』5月号、pp.81-88
- 平田真美（1999）「ほめ言葉への返答」『横浜国立大学留学センター紀要』vol.6、pp.38-47
- 古川由理子（2003）「書き言葉データにおける＜対者ほめ＞の特徴—対人関係から見た『ほめ』の分析」『日本語教育』117、pp.33-42
- 丸山明代（1996）「男と女とほめ—大学キャンパスにおけるほめの行動の社会言語学的分析ー」『日本語学』5月号、pp.68-80
- 横田淳子（1985）「ほめられた時の返答における母国語からの社会言語学的転移」『日本語教育』58号、pp.203-217
- Barnlund, D. C. & Arakai, S. (1985) "Intellectual encounters: The management of compliments by Japanese and Americans." *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 16(1), pp.9-26
- Brown & Levinson (1987) Politeness: Some universals in language usage. Cambridge: Cambridge University Press.
- Holmes (1986) "Compliments and Compliment Responses in New Zealand English." *Anthropological Linguistics*, 28 (4), pp.485-508
- Leech, G. N. (1983) Principles of Pragmatics. [池上嘉彦訳 (1987) 『語用論』紀伊國屋書店]
- 日本語教科書**
- 清水崇文（2013）『中上級学習者のためのブラッシュアップ日本語会話—みがけ!コミュニケーションスキル』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク（2012）『みんなの日本語 初級I 第二版 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク（2013）『みんなの日本語 初級II 第二版 本冊』スリーエーネットワーク
- できる日本語教材開発プロジェクト（2011）『できる日本語 初級』アルク
- できる日本語教材開発プロジェクト（2012）『できる日本語 初中級』アルク
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（2011）『初級日本語 げんき I 第二版』ジャパンタイムズ
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（2011）『初級日本語 げんき II 第二版』ジャパンタイムズ
- ボイクマン総子・小室リー郁子・宮谷敦美（2006）『聞いて覚える話し方 日本語生中継・初中級編<1>』くろしお出版
- 山崎佳子・佐々木薰・高橋美和子・町田恵子・石井怜子（2008）『日本語初級1 大地』スリーエーネットワーク
- 山崎佳子・佐々木薰・高橋美和子・町田恵子・石井怜子（2009）『日本語初級2 大地』スリーエーネットワーク

(Received:June 19,2018)

(Issued in internet Edition:July 1,2018)